

大学放浪記 (46)

伊藤信孝

マエジョ大学・客員教授・再生可能エネルギー学部

本報では「SAFE Network」について記す。この組織は研究者（主として大学の教員、研究所の研究員、研究者など）で構成するアジアを中心とした人的ネットワークで有り、主たる活動としては、定期的にアジアの各地で開催する学術研究活動（国際会議、ワークショップ、セミナー、シンポジウムなど）であり、対象とする範囲は。内容的にはその名称が示すように持続可能な農業(Sustainable Agriculture)：食料(Food)とエネルギー(Energy)である。筆者がこの組織に関わるようになった経緯を以下に示す。あまりはっきりした記憶はないので、大体の所を記載する。コロナ禍が発生する4~5年前ベトナムのホーチミン市にあるノンラン（農林）大学で開催された国際会議（大学の創設記念祝賀事業に絡むイベントのひとつ）に招待され、特別に基調講演を依頼された時に、一人のインドネシアの大学の先生（N先生としておく）から接触があった。その前年にも類似のイベントがあり、同じように招かれて参加したが、残念ながらその時はお互いに直接顔を会わせる機会は無かった。恐らくその年に筆者が参加していたことを知って、会う機会を探しておられたようである。何故か？と言うと、上記ネットワークの中身が農業であり、食料とエネルギーをそのテーマにしたものであるからである。筆者が1994年に三重大学（日本）、江蘇大学（中国）、チェンマイ大学（タイ）の3大学の協力を得て立ち上げた3大学国際ジョイント・セミナー・シンポジウムのテーマがグローバル・テトラレンマ（地球規模の4重苦で、人口、食料、エネルギー、環境）であったために、一緒にやっていけないかとの意図が働いての接触であったと理解、認識して居る。当時その先生は助教授であったが、やがて教授に昇格し、強力なリーダーシップの元で活発な活動を展開し、今日に至っている。このN先生との出会いを契機にSAFE Networkネットワークをチェンマイ大学に紹介したが、当初は一部の人から、あまりアカデミックな活動をする組織ではないのでは無いかとの懸念を示す人も居たが、筆者のその時の意見は、そうならば、われわれが参加し、積極的にアカデミックな組織にすれば良いではないか、と言うのが素直な意見であった。それ以後チェンマイ大学もSAFEに加盟し、S先生がカントリー・コーディネータ(Country Coordinator)になった。タイのプーケット(Phuket)でも地元のPrince of Songkla 大学を中心としてワークショップを開催し、組織の中でも活発に活動を示すような存在になった。コロナ禍で残念ながら3年ほど、現地を訪れてのイベント開催はできなかったが、コロナ禍の落ち着きを契機に再度従来と同様の活動展開に意欲を燃やしている。はじめてベトナムのノンラン大学で顔を合わせてから、インドネシアへも何度も招聘いただき、感謝に堪えない。ポゴール農業大学は上記3大学事業で何度も訪れ、またかつての博士課程留学生も未だ頑張っている関係も有り、数え切れないほどお邪魔した経緯が

ある。昨年（2022年11月）もボゴール農業大学が3大学事業のホスト大学であった関係から、1週間ほどお邪魔した。当該ホスト大学には、筆者がよく知る唯一の大学であったが、同校のN先生と知り会ってから、バリ島地域のワルマデワ大学、ジェンバー大学、パジャジャラン大学、アンダラス大学等、これまで訪れた事の無い大学を訪問する機会を得た。訪問の目的は上記した国際学会、ワークショップなどであるが、サマー・スクールにも招待いただき、話題提供や基調講演など、多くの貴重な経験を得る機会を頂いた。アジアを中心としたネットワークであるため、インドネシアのみならずフィリピンにも3度ほど訪れる機会を得た。フィリピンはCBSUA（Central Bicol State University of Agriculture）、首都マニラでの国際学会、ワークショップに参加の機会を得た。極めて有り難く感謝しても仕切れない。ベトナムのノンラン大学は、ホーチミン市にあるが、日本の農業機械学会のいくつかの会員有志が、ハノイにあるベトナム農業工学及びポストハーベスト研究所、VIAE（Vietnamese Institute of Agricultural Engineering & Post-harvest）が主催するワークショップに参加しておられたので参加させて貰うことにした。たしかイベントが始まってから2回目か、3回目からの参加ではなかったかと記憶する。以来毎回の参加であったが、ノンラン大学でも同様のワークショップをその後開催する事になり、一度のベトナム訪問でハノイとホーチミンの2つの都市を訪れるようになった。そうしたイベント参加を通じて多くの人を知ることができた。今でも長期に亘りその関係は続いており、知り合った学生と同様、筆者の貴重な財産になっている。定年退職後チェンマイ大学に客員教授として招聘される以前から上記した様にベトナムのホーチミン市にあるノンラン大学は知っていたし、当時副学長で有り、その後学長になったG先生とも旧知の仲であった。家族で（といっても家内と娘2人と）出かけたベトナム旅行でも、半日を自分一人で団体から抜け出し、失礼して大学訪問をしたほどで、驚くことにG先生は筆者の訪問の度に、常に自ら飛行場までその都度出迎えに来て頂いた。学長になられてからは、流石にそうした対応は難しくなり、配下の職員を手配して出迎え頂いた。学長を2期勤められて、退かれた今でもその精神、姿勢は変わらず、やはり人間関係、国際交流の基本が相互信頼である事を痛感している。お互いに信頼できる関係であるからこそ良好な関係を続けることができるのである。ちなみに筆者は家族旅行が如き私的な旅行でも半日ほど時間を取って現地の大学を訪れ、セミナーなどを行い、教員には昼食を振る舞う様にしてきた。折角の機会を可能な限り利用して、訪問の機会を作り、役に立つことができれば幸と考えて来た。定年退職後は一層その精神は高まり、そうした姿勢、挙動を積極的に行うようにして居る。コロナ禍で相互に直接訪問する機会が無くなり、G先生も学長任期を終えられたが、そのときから向こう10年ほどは大学の教授として残るので、機会があれば、何時でも来て下さいとの有り難い言葉も頂いている。そのG先生の話が、N先生一行とチェンマイ大学を訪れたときに出て、人脈、人間関係の重要性を再確認した次第である。そもそもノンラン大学との関係は筆者がチェンマイ大学に招聘されてから、本格的に始まったので、口幅ったい言い方ではあるが両大学の間を開拓したのは自分だと

勝手に自負している。定年退職直後にチェンマイ大学に招かれた当初は半年ほど滞在したが、その時点では正式な身分は無く、給与もない状態であったが、大学から供与されたのは宿舎（滞在費無料）だけであった。その翌年から正式に客員教授の身分（Status）を頂き、その後13年余（残り2年はコンケン大学で1年と、現在のマエジョ大学で1年余である）を過ごすことになるとは予想だにできなかったが、まさに軌跡に等しい人生が展開したと言うべきであろう。そして未だにタイの大学を放浪し、貢献以上の迷惑、お世話を掛けている。そうした過去の経緯が、チェンマイ大学を訪れた時の学部長の口から出ようとは想っても居なかったのが驚きであったが、同時にインドネシアのN先生もG先生をよく知る仲であり、相互に我々のグループの範囲であることを誇らしげに、顔に出していた。誇れる友人を持つことは、逆に自分自身もその友人にとって恥ずかしくない存在で無ければならない。相互信頼が無ければ友人としてネットワークは拡がらない。各自相方が誇りと尊厳を持ち、他人や社会に恥ずかしくない存在で無ければネットワークは拡張しない。カネのある所に人が集まる組織もあるが、その多くは金がなくなると、凋落も速い。基本的に人間関係が成り立たない低いレベルの信頼関係では、組織も人間関係も持続可能なものとはならない。相互友好や相互信頼はカネでは買えない、しかしカネが無ければ十分な活動はできない。鶏が先か、卵が先かの話になるが、やはり基本的に人間として、グローバル社会人（世界人）としての基本的常識が備わっていなければ話は終わりである。これまで良き仲間にも恵まれ、支えられ、未だにその幸せの渦中にある自分を心底有り難いと感謝している。大学の国際交流事業の多くが、評価を上げるための見せかけであったり、目的や趣旨が明確でない事業であったり、海外に行きたいと言う点に本当の目的があったり、どうも筆者からすると腑に落ちない事業が目立つ。よくよく注意してみると、どうも目的や趣旨が大学や学生のためではなく、そのポストに座った人の名誉欲や私欲になって居る場合が多い、これは大学に限らず、その他の多くの組織でも共通する現象で有り、日本人のアイデンティティ（Identity）が随分と変わったと言われる所以でもある。実績も実力も無く、リーダーの属する学部が潤うことしか考えず、役職人事を行うから何時まで経っても大学は発展しない。準備や練習も、事前研修もせずに相手大学に学生を送ったり、するから学生も成長しない。他大学もやっている事業だから、うちの大学もと言うわけでもねごととはするが、オリジナルなものがなく、高い教育のレベルではない。学生達もイベントに参加終了して帰国しても報告書提出の義務もない。事業の改善提案も無ければ、研究論文発表のみが唯一の義務と教員も認識して居るから、参加応募学生に至ってはその他に気を配る余裕も積極性もない。応募時間に間に合わないから、大急ぎで論文作成をし、間に合わせる。参加した者だけが国際交流事業を経験する機会を得て、得をすると言う不公平さや組織としての透明性にも欠ける。そのときがすめばそれで良いという極めてレベルの低い事業もある。要は、国際交流に携わる関係者、特に「組織の長」に「何をやるか、やりたいか」という意欲や方向付けが全く見えない。あたかも「担当に任命されたから、従来通りに事業を継続踏襲する」と言うだけでオリジナルな事業展開を考えるわ

けでも無ければ、殆どが人任せで自らのオリジナルな情報発信がない。リーダーが何を考えて居るかわからなければ、向かう方向が見えず名ばかりの事業で終わる。中身が無ければ予算の配布は無論なされない。そして最後に事業そのものが消滅する。やはり事業を持続可能なものとするには、責任者が責任を持った行動、特に事業の経緯、理念、目的、効果、について勉強しこれまでの実績を熟知して居なければならない。しかし、責任者がそうした行為を恥ずかしいと思うのであれば、それは既に私欲が働いていると考えて間違いない。世代交代で余り経験の無い若い世代が、「長」や、それに準ずるポストに就くと、前任者のやってきたことを全否定し、せっせと足跡を消す努力をし、あたかも自分が新しい方向を示して行動して居るかの如き振る舞いで業績を稼ごうとする。やるべき事が全くわかっていない。自分（筆者自身）の事を考えると恥ずかしいが、大学のため、学生のためと想えば、知らぬ事を知っている人に聴くことは恥ずかしくは無くなる。いつまでもこうした姿勢を続け、何もしないと返って大学の事業展開、進展の障碍になる。少なくとも「長」または責任者は年に1～2度は国際交流に関する論文を書き関係誌に進むべき方向を示唆する努力をするべきである。国際交流に於ける戦略や政策など、情報発信する材料はいくらでもある。自らが方向を示さず、組織構成員の大方の意見に迎合しているというのが一般の大学の「長」たるリーダーが取っている姿勢に見える。なぜなら、積極的に動けば、ミスも出るし、評価も落とし大学の人気も落ち、その座を去らねばならないからである。やはり行動は最終的には保身となる、見え透いた予定通りの行動である。本人がそうしたいと想っていなくても周りがそれを許さない場合も少なくない。

人の一生は人類の歴史から見れば一瞬であるが、その一瞬であっても同じ時間を共有したと言うことは思わぬ縁で有り、これまでの人生のどれひとつとして狂っていれば現在はない訳だから、できるだけ長く生きる時間を共有したいと考えて居る。何という良き友人に恵まれたことかと感謝し、生きながらえてきたことを素直に喜べる人生にしたい。定年退職後も地位や名誉、カネに気を揉む以上に、他の人に、或いは社会に、また世界に何かができる本当に嬉しいと感じる悟りの域に近づきたい。未だに競争心をむき出しにし、羨望の眼で共に生きた仲間を見据えても、余りにもはかない人生になるばかりではないか。

以下に SAFE Network の代表、N教授とともにチェンマイ大学、マエジョ大学の2つの大学を訪れ、今後の SAFE の活動への協力、支援、共同主催について話し合った時の写真を示す。



左の写真：SAFE Network 代表（左）とチェンマイ大学 Agro-industry 学部長（右）。

中央の写真：マエジヨ大学学長（左）と SAFE Network 代表（右）

右の写真： ギフト・エクステンジ（記念品贈呈・交換）